

目的 日本の気候は春・夏・秋・冬の四季にわたって変化するため、各々の季節に最も適した衣服を着用することが衛生学的立場から必要と考える。このたび、被服構成学研究会委員会で小・中学校、児童・生徒の着衣の実態について全国調査が行われ、松江市を担当したので、その結果について被服構成の見地から検討した。

方法 調査期日は昭和54年4月、7月、10月、昭和55年1月の計4回で、対象は松江市内の小学5・6年、中学1・2年の各学年、男女40名ずつの合計320名である。調査の主な内容は着用衣服の種類、枚数、形態、重量および着用感覚である。

結果 夏は他の季節に比べて着衣重量が少なく、着衣形態も簡単であるのに対して、冬は着衣重量が平均で男子は夏の約3.1倍、女子は夏の約2.3倍と最も多い。このように男子に夏と冬の差が大きいのは、夏の男子の服装がランニングと短パンといった軽装に対して、女子は夏でも上半身にブラウス1枚のみというのは少なく、大部分は下着にツミーズかブラジャーを着用していること、また冬の男子の服装は学生服と長ズボンといった着衣重量の大きい衣服に対して、女子はセーラー服とスカートの組み合わせが多く、男子に比べて着衣重量は小さいことがあげられる。春と秋では、いずれの学年も春の方が着用枚数および着衣重量とも大である。これは春には冬の寒さに体が慣れて寒さに敏感であるため、秋に比べて厚着の傾向を示すものと思われる。次に衣服の着用感について、寒暑感では男子は女子に比べて冬にあたたかいと感じるものがやや多くみられたが、個人差が大きく、性、年齢、季節、体型による有意な差は認められなかった。